アンジュール

ある犬の物語

ガブリエル・バンサン作
アップローン出版 1985

冬休みがおわりました、みなさんあけましておめでとうございます。あたらしい１年がはじまりましたね。冬休みはいかがでしたか？今年も図書館に来て、いろんな本にたくさん出会ってみてください♪さて、今年の干支は、「戌」。犬年です。ということで、今月はガブリエル・バンサンが鉛筆デッサンで描いた犬のものがたり『アンジュール』を紹介します。

この本には字が一切ありません。色もありません。モノクロの鉛筆デッサンで描かれた本です。文字も色もないのに、それでもこの本の中には音や犬の声、言葉が、１ページ１ページにつまっています。ページをひらけば、まるでその場に自分がいるかのように、周りの音や犬の声がきこえてきます。

ある日、飼い主の人の車から道へ投げ捨てられてしまった犬、アンジュール。この最初のシーンからもう切ない。車の窓からまるでゴミを捨てるかのように、乱雑に道路へと投げ出されるアンジュール。そして次のシーンでは、捨てないでと言わんばかりに、自分を捨てた飼い主の運転する車を必死で追いかけるアンジュールの姿に、胸をしめつけられます。アンジュールは、その後も必死で車を追いかけますが、到底車には追いつけません。とうとう追いかけるのをあきらめたアンジュールはあてもなく、道を歩きつづけます…。

どうして、ここまで、文字や色がなくてもこんなにも、情景や音、犬の声が伝わってくるのか…それはきっと作者ガブリエル・バンサンの犬のデッサン力にあるとわたしは思います。犬のたたずまい、そして、細やかな犬の表情、どのページからも犬の悲痛な叫びが苦しいくらいに伝わってきます。

どのような事情かはこの本ではわかりませんが、どのような事情であっても飼っている動物を捨てるという行為はとても悲しく残虐なことです。この本の中のアンジュールの表情はずっと暗く、悲しく、くもっています。けれど、ものがたりの最後、１人の男の子がアンジュールに笑いかけて歩み寄ってくるシーン、アンジュールの表情は後ろ姿で見えませんが、わたしは未来への光が少し見えた気がします。ずっと暗い場面ではないんだよ、という風に。どうか、次のお家ではこのアジュールが穏やかに幸せで暮らせるよう祈らずにはいられません。そして、明るい表情であってほしいなと心から思います。